随筆 話題の読み取り／事実と意見・感想の見分け方

私が住んでいる北海道には梅雨の季節がない。

そのため東京方面に住む友人知人から、梅雨どきのうんざりする日々について聞かされても、いまひとつピンとこなかった。

「暑さがそれほどでない日でも、湿度が高いから、じとっと肌が不快に汗ばんでくるのよ」

「押し入れを閉めきっておくと、なかにカビがはえちゃうわけ」

「除湿器はこの時期の必需品なのね」

友人たちがかように嘆く梅雨どき、それとは反対に北海道は、カラッと晴れわたった爽快な初夏を迎えるものだから、ますます①梅雨のうっとうしさが想像しにくくなってしまう。

北海道には梅雨がない、と乱暴に言いきったけれど、蝦夷梅雨なる言葉はあるらしい。短歌や俳句に使われる季語で、東京方面の梅雨と区別するためだとか。蝦夷梅雨の時期は六月の末頃、と※ものの本に書かれてあり、そう言われれば六月の下旬はわりあいと雨がぱらつくな、とあらためて気づかされた。ようやく気づくぐらいの雨量であり、しかも湿気はほとんど感じないのだから、やはり、これは東京方面で言うところの梅雨にはあてはまらないだろう。

A 三十代も後半になって、はじめて梅雨の季節を体験した。②梅雨のまっただなかにあるその時期に、所用で東京へでかけたのである。本当に友人知人がこぞって嘆いていたとおりだった。暑いというよりも、むしろ肌寒いぐらいの日でも肌が不思議と汗ばんでくる。妙にしつこくて、キレの悪い、べとつく汗だった。冷や汗に近いな、と私は思ったものである。また空気全体に息苦しさを感じた。空気中の酸素がたりないような、吸っても吸っても肺に空気が流れこんでこないような……。

B しかし私はひそかに感動もしていた。ああ、これが梅雨なのか、こういうのが梅雨というのか。なるほど、そうだったのか。が、感動は口にはだせなかった。東京在住の友人たちが、わざわざ梅雨どきめがけてやってきた私に、いたく同情してくれたからだ。

「よりにもよって、こんな時期に札幌からくるなんて大変だったでしょう。体調をくずさないようにね」

口々に慰めてくれるのだから、梅雨の初体験にバンザイ、などという本心は言えるものではない。

（藤堂志津子『陽だまりの午後』朝日新聞社 所収「梅雨と吹雪」による）

※ものの本……その方面のことが書かれている本。

例題

本文中のA・Bの2つの段落のうち、友人たちとは対照的な、梅雨に対する筆者の感想が述べられているものを選び、記号で答えなさい。

〔　　〕

話題の読み取り／事実と意見・感想の区別

筆者の体験・見聞・感想などを、筆に任せて自由な形式で書いた文章を**随筆**（ずいひつ）という。随筆には、体験などを文学的に描（えが）いたもの、筆者の見方・考え方を説明的に述べたものなどさまざまな形式がある。

	話題	内容
文学的随筆	季節・自然・旅・日常・家族　など	体験や、それに対する感想・思いなど。
説明的随筆	言語・社会・科学・読書・生き方　など	ものの見方や筆者の考えなど。

随筆は、次の点に注意して読み進めるとよい。

①**話題**を捉（とら）える。
　題や、繰（く）り返し使われる語句に注目する。

②**事実**と**意見**・**感想**を区別する。
・事実………筆者の体験や見聞など。
・意見・感想…経験や見聞に対する筆者の思い・考え。
※意見・感想を表す文末表現
　（例）…と思う。…と感じる。…だろう。…べきだ。

③**主題**（筆者が特に伝えたい内容）を捉える。
※意見・感想の部分に描かれていることが多い。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「梅雨のうっとうしさ」を筆者が実感したことが描かれているのは、本文中の**A**・**B**の２つの段落のうちどちらか。記号で答えなさい。
〔　　〕

(2) ――線②「梅雨のまっただなかに……でかけたのである。」の一文は、事実と意見・感想のどちらを表したものか。事実なら**ア**、意見・感想なら**イ**で答えなさい。
〔　　〕

(3) 本文で中心的に描かれている内容として適当なものを選びなさい。
ア　北海道特有の梅雨の時期の過ごし方。
イ　初めて体験した梅雨に対する筆者の感動。
ウ　筆者に対する友人たちの心づかい。
〔　　〕